

ずの 變野大豆ものがたり

丸山美子

◆先人たちが大切に生きてきた生活を見つめ直す
ひとは「心地よい」ことがあると、顔が自然とほころびます。

私達「東京ひのはら地域協議会」まっこの会は、檜原村が抱えている課題（高齢化、過疎化など）を解消するため、

人々の暮らしから学べることはないか、その生活を見つめ直すために先人たちが大切にしてきた暮らしの話を聞き、今も受け継がれている生活体験を学ぶ機会を持つことに努めています。變野大豆ものがたりは、そうしたまっこの会の活動の中から生まれました。

村の人々の話を聞くたびに、家族のため、地域のために必死に働

いてきたことに感動します。そして何よりも自分自身のために「心地よい」ことを忘れずに考え、行動してきた事を教えてくれます。聞いている私たち自身の心に自然と自分の生活環境を見直し、何かしたいという希望が湧いていることに気づきます。

變野大豆ものがたりにはその希望が湧く「心地よい」ヒントがたくさん詰まっています。

◆高橋政秋さん・ハツエさん
夫妻が育ててきた變野大豆

大豆は、東京都西多摩郡檜原村の集落・湯久保地区で、一組の夫婦、高橋政秋さん・ハツエさんによって、長年にわたり栽培されてきた大豆です。

檜原村は多摩川の支流、秋川の源流域で、急峻な山嶺に囲まれた渓谷であり、総面積の93%が林野です。多くの集落が谷あいの溪流沿いに位置している中、湯久保地区は他の集落とは異なった環境にあります。

◆天界のような湯久保地域

湯久保はまず、谷あいの地区から山（御前山）へのぼること3キロ。細い林道を上がっていくと、突然、山の中腹の南斜面に、開けた土地があらわれます。そこが、湯久保地区です。標高は600から800メートル。一日中、よく日の当たる、開けた斜面にたたずんでいると、視界に入るのは、山々の尾根と、果てなくつづく空。聞こえてくるのは、鳥のさえずりと、こずえを揺らす風の音だけ。とても静かな世界。誰もが、

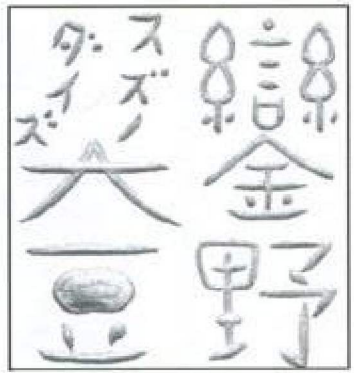


特許庁前でハツエさん

まるで天界にいるかのような、不思議な気持ちになっていきます。

◆山の中で山を汚さずに暮らす

湯久保の人たちは、その特異な住環境から、買物に出るのも一苦労です。ですから、今も昔も、畑で野菜をつくり、山菜を採ったり、漬け物や味噌などの保存食をつくってくらしています。沢の湧き水を水道として利用し、燃料にはプロパンガスの他に、山から切ってきた薪や、自ら焼いた炭を使っています。畑の肥やしには、山の落ち葉や、飼っている動物の糞、便所から汲み上げた糞尿などを利用しています。つまり、山の中で、山を汚さずにくらすことを、今も昔も続けているのです。この地区の人たちは、山を大切にしなければ、人間の生活に跳ね返ってくることをよく知っています。自然から、ほんのちよつとずつ必要とするものをいただいて、ありがたく頂戴するくらい。人は自然の端っこで、邪



ジーンバンク登録種・
商標登録出願中

魔をせず、生かしてもらう、というくらし。まさに、「自然と共生したくらし」を、湯久保地区の人たちは続けてきたのです。

蠻野大豆は、このような湯久保地区の特異性、つまり、①他の集落から遮断された環境と、②自然を汚すことなくくらし続ける住民の生き様によって、他の種との「交配」や変異を免れてきました。

◆「おとうちゃんの大豆」

高橋政秋さんとハツエさんは、とても仲のいい夫婦です。お二人共に、湯久保地区で生まれ育ちました。蠻野大豆は、その名が付けられるまでは「おとうちゃんの大豆」と呼ばれてきました。というのも、政秋さんが青少年時

代に、「口減らし」のために奉公へ赴いたとき、奉公先の地主からもらってきた一握りの大豆が「種」となつて、育てられてきたからです。「おとうちゃんが、苦勞したときにもらってきた大豆だから」と、ハツエさんが、60年もの間絶やすことなく、大事に育て続けてきました。そして、毎年冬が来ると、ハツエさんの手によって味噌となり、くらしの中に息づいてきたのです。

◆一粒一粒に歴史が詰まっている

ハツエさんがこの蠻野大豆を栽培し続けたのは、他にも、次のような理由があります。それは、①近年によく見かけるようになった白い大豆（蠻野大豆には黒いスジがある）と比べて、粒が大きいこと。②味が、濃くて甘いこと。そして、③湯久保という土地に合っていて、育てやすかったこと。

けれどもやはり、一番の理由は、その一粒一粒に、おとうちゃん（政秋さん）の生きてきた「歴

史」が詰まっているからです。ここ湯久保地区で、二人で苦楽を共にして生きてきた「歴史」が詰まっているからです。蠻野大豆は、夫婦のお互いを思う愛情によって、守り育てられてきた、貴い品種なのです。

◆大豆をはぐくんだ郷土の名前を

蠻野大豆という名は、ハツエさんの考案によるものです。

湯久保地区には「蠻野御前神社」という神社があります。御前山の中腹にある湯久保地区を守りいただいている神様が奉られています。自然を畏れ敬いながら生きているこの地区の人たちは、毎年、神様に奉納するお祭りをとても大切にしています。伝統ある「獅子舞」は、一度見たら、誰もが魅了される独特の味わいがあり、世代を超えて愛され続けています。

湯久保地区の人たちは、この土地をとて愛しています。そして、湯久保で生きてきたこと、くらししてきたことに誇りをもって

います。ですから、いつも、自然に対して耳を傾け続け、自然を大切にしたくらしを続けているのです。神様を大切にお奉りするの、も、「自然が自分たちにお裾分けしてくれた日々の恵み」のありがたさを、心底、感じているからなのです。

蠻野大豆はその種を、一組の夫婦の愛によって守られ、湯久保地区に住み続ける人々の、郷土愛によって守られ、神様（自然）によって守られてきました。名の由来には、大豆と、大豆を育んだ郷土が、これからも、人々の心の中で愛され続けること。くらしや祭りが受け継がれていくことを願う、祈りにも似た思いが込められています。



蠻野神社